

一 願がんぶつ為ち未来 演説りょうかいげ令開解の事

仰せに云はく、此の文は彌勒菩薩等、末法当今の為に、我久遠より来このかた、是等の衆を教化せりの言を、演説令開解せしめ玉へと請しょうじ奉る経文なり。此の請文しょうもんに依って寿量品は顕はれたり。五百塵点久遠の法門是なり。開解とは教主釈尊の御内証に此の分ををさへ玉ふを、願はくば開かいちえしめ玉へ、同じく一会の大衆の疑ひをも解かいまししめ玉へと請ずるなり。此の開解の語を寿量品にして、汝等当信解と誠いましめ玉へり。若し開解したまはずんば、大衆皆法華經に於て疑惑を生ずべしと見玉へり。疑ひを生ぜば三惡道さんなくどうに墮おつべしと、既に彌勒菩薩申されたり。此の時寿量品顕はれずんば、即当墮惡道すべきなり。寿量品の法門大切なるは是なり。さて此の開解の開に於て二あり。迹門の意は諸法を実相の一理と会えしたり。さては諸法を実相と開きて見れば、十界ことごと悉く妙法実相の一理なりと開くを開ほんぬ仏知見と説けり。さて本門の意は十界本有と開きて始覺のきづなを解きたり。此の重を開解と申されたり。仍って演説の二字は釈尊、開解の両字は大衆なり。此の演説とは寿量品の久遠の事なり。終に釈尊、寿量品を説かせ玉ひて一切大衆の疑惑を破し玉へり云云。